

コロナ禍の岐阜県観光、「野外行楽地」高い需要

岐阜県で観光地といえば、春と秋の高山祭で知られる飛騨高山、世界遺産の合掌集落がある大野郡白川村の知名度が高い。県中央部に位置し、名古屋市から車で約50分の美濃加茂市という意外な場所で昨秋、ウィズコロナ時代の観光ニーズの傾向が顕著に表れた。

同市は、県内有数の果樹産地で毎年お盆過ぎから10月中旬ごろまで観光果樹園でナシ狩りを営業する。昨シーズンは営業開始以来、多くの来場者があり、9月末にはナシが無くなり前倒しで終了。一昨年よりも約1千人多い約7千人が訪れた。近年右肩下がりが続いていただけに「ナシ狩りは野外なので、コロナの影響ではないか」と果樹農家はみる。

市内の県営公園と道の駅の隣接地に昨年10月開所した外資系ホテルも、手応えをつかんだ。開業以来、週末はほぼ満室の状態、政府の観光支援事業「Go To トラベル」の追い風もあり、予想以上のスタートを切れたと話す。当初見込んでいたインバウンド（訪日外国人客）需要の代わりに近場観光の需要が増し、昨年10月の宿泊者は愛知県民が42%、岐阜県民が23%、三重県民が4%と東海3県の住民が約7割を占めた。

3密を避けながら近距離圏で過ごす旅のスタイルは、自宅から1～2時間程度の距離が目安とみられる。家族や友人などの少人数単位で動き、移動手段は車を使うことが多い。美濃加茂市は東海3県の都市部から程よい距離に位置することが功を奏しているようだ。

近場観光の需要の高さは、外資系ホテルの目の前にある県営公園「ぎふ清流里山公園」の入場者数にも表れた。「平成記念公園日本昭和村」から名称を変更し、入園料を無料にして2018年4月に開園した。昨年の入場者数は9月が前年比の1.26倍、10月は1.1倍、11月はイベントが軒並み中止となる中ほぼ前年並みだった。近場観光で、これまで見過ごしていた地域の魅力に気付く機会となることを期待したい。

岐阜新聞社 美濃加茂総局長 沢野都



ナシ狩りを楽しむ女性たち＝昨年8月、岐阜県美濃加茂市山之上町



開業したホテルの前で談笑する関係者＝昨年10月、岐阜県美濃加茂市山之上町、フェアフィールド・バイ・マリオット・岐阜清流里山公園